

Eureka XIII

六年制通信 No.39 令和8年3月13日(金)号

負荷をかける

昔からいわゆる外国文学の翻訳の文章が苦手で、正直に白状するとドストエフスキーも『罪と罰』と短編数本を読んだくらいだし、トルストイの『戦争と平和』も読み通していません。英米文学の場合なら翻訳が嫌なら原書で読めばいいのではないかと、これは成立しますがトルストイなどロシア語ですからね、私には無理です。また、西洋哲学の翻訳書にもアレルギーに近いものがあります。あれこそ原書の言語を勉強して原書で読むべきですね。ハイデガー研究の木田元さんも、ドイツ語を綿密に読めないとハイデガーは決して読めないと。大体、皆さん、岩波文庫のカントを手にとってごらんよ。何が書いてあるのか、日本語なのに、さっぱりわからないではないですか。カントの『純粹理性批判』など、あまりにも日本語訳がわからないから英語版を開いたことがあります。すると、訳書によく出てくる「悟性」に当たるところ、何のことはない英語では *understanding* とあるではないですか。それなら「理解」でいいではないですか、「理解」で。こういうところ、本当に日本の哲学翻訳者は不親切ですね。

翻訳に対する不信感はまだあって、学生時代に推理小説の翻訳がいかにてたらめかを詳細に論じた本を読んで、余計に嫌になったことも原因かもしれません。前に紹介したかどうか忘れましたが、「逃げろ、全ては露見した」と訳すべきところを「ハエよ！すべては露見した」と訳した本がありました。原文は *Fly! All was discovered.* です。こんなの、世に出してはいけませんよね。

もう一つ、私は高校生のころから遠藤周作をずっと読み続けていまして、その関係で必然的にモーリヤックの『テレーズ・デスケルウ』を手取ることになるのですが、これが全く面白くなかったという経験があります。しかし、のちに遠藤さんの『私の愛した小説』、これは一冊すべて『テレーズ・デスケルウ』について書かれており、遠藤さんの問題意識も、どうしてそんなにテレーズに魅力を感じるのかも読めばよくわかるのですが、この本の巻末に遠藤周作訳の『テレーズ・デスケルウ』が収められているのです。そしてそれを読んだら、最初に手に取った新潮文庫の訳本の時と違って非常によくわかるのですね。何もかも分かった人が訳していると、こんなにも違うものかと妙に感心した覚えがあります。皆さんも試してみてください。

現代の日本語で書かれた文章を読むのは、もちろん抵抗もないし、文章の上手い下手を感じることもできるわけですが、古典だと注釈によってよくわからなくなったりしますね。『論語』でもそうです。例えばね、ちょっと難しいかもしれないけれど君たちには『論語』に親しんでもらいたいから紹介するけれど、孔子は「意」「必」「固」「我」

の四つを絶っている、つまり孔子にはこの四つの資質がないということが書いてあるのですが、この四つの意味ですね、問題は。私の愛用している山田勝美の『ポケット論語』では「意」：当て推量をする、「必」：無理押しをする。「固」固執する、「我」：我を通す、なのですが宇野哲人の『論語新釈』では（この人は今上陛下誕生の折、お名前の選定に関わられた大学者です）、「意」：私意をもって事に臨む、「必」：なんでも予定通りに行おうとする、「固」：一事を固執して融通の利かないようにする、「我」：ただ我あるを知って他人を考えない、となります。さらに、しつこいですが、諸橋轍次の『論語の講義』では「意」：先方がまだその意志を表明する前に、こちらから気を廻して先方の考えを推し量ること、「必」と「固」：為す場合、守る場合の悪癖、「我」：己れ中心に考え、己れ中心に動くこと、だそうです。何が言いたいかわかりますか。古典の場合、『論語』のような超有名なものであればなおさら、膨大な注釈があります。諸橋を先に読んででも恐らく「必」と「固」は何のことかわからないでしょうし、山田と宇野の「必」はずいぶんと印象が違う気がします。ですから、古典の注釈は、西洋の古典でも同じなのですが、絶対に通らなければいけないという鉄板の注釈書はあります。しかし、それだけでは不十分なのです。ただ、私はあまりに難しい表現のしてある注釈書は信用しません。

確か伊藤仁斎でしたか、要約すると「言葉がわかりやすく理屈もスッキリしているものは必ず正しい。わかりにくいものは、まず邪説である」と言っています。

今週のおすすめ

・秋吉理香子 『ガラスの殺意』（双葉文庫）

『博士の愛した数式』の主人公は記憶が80分しか持たない数学者。今回は10分のしか記憶が保てない主婦。そんな彼女から「人を殺しました」と通報を受け、警察は捜査を開始する。しかし、もちろん彼女は何も覚えていない。自分がいまだに女子大生だと思っているくらいだから、全く話が通じない。殺されたのは20年前の通り魔事件の犯人。その犯人に両親を殺されたのが彼女。彼女自身も犯人に追われ、逃げる途中で車にはねられ後遺症を患う。それが高次脳機能障害。これは少しネタバレですが最初の方に出てくるのでいいかな。彼女は結婚していてその相手が、当時彼女をはねてしまった男性。償いの気持ちから彼女のリハビリを手伝ううちに好意を持つようになったとのこと。しかしこの夫、彼女が犯人であることを裏付けるようなことばかり証言をする。まるで逮捕してもらいたいかのよう。そこへ彼女と懇意にしている老婦人が「絶対に彼女は犯人ではない」と、むしろ夫から虐待を受けていたと証言する。その証言も具体的で、弁護士の手配まで親切に行う老婦人を見て刑事たちは夫のアリバイを調べなおす。するとわずかな矛盾を発見するのだが…。

10分しか記憶の続かない彼女の取り調べは遅々として進まず、今度は老婦人にまで魔の手が…。彼女は本当に犯人なのか、刑事たちの疑いが向けられる夫の方が真犯人なのか、謎は深まるばかりだが、ラストですべての真相が明らかとなり、さて自分が同じ立場ならこんなことが出来ただろうかと、しばらく考えさせられました。

BGMは Rihanna の *Lift Me Up* でした…。